

現地で学ぶ社会科の授業実践

—— ベルリン方面への修学旅行から学ぶ ——

前デュッセルドルフ日本人学校 教諭

滋賀県愛知郡愛荘町立愛知中学校 教諭 松 林 淑 子

キーワード：国際理解，平和学習，現地理解

1. はじめに

町の中央部にライン川が流れ、ノルトラインヴェストファーレン州の州都であるデュッセルドルフは、ドイツ北西部に位置する商業都市で日本企業が数多く進出しているため、日本人の児童生徒数も多い。デュッセルドルフ日本人学校は小学部・中学部併設校であり、全校児童生徒数は500人前後と北米欧州地区では最大規模となっている。

緑豊かで春には花が咲き誇り、庭先にもリスや野ウサギの姿が見られる自然環境のもと、休日にはライン川沿いでジョギングやサイクリングを楽しむ人々の姿が多く見られた。また、オペラハウスや美術館などがあり、身近な場所で本格的な音楽や美術作品を鑑賞することができる文化的環境もある。

年に1度“JAPAN TAG”（日本デー）が開催され、書道や折り紙など日本文化を紹介するブースが数多く設けられたり、焼きそばやお好み焼きなど日本食が販売される出店が出店されたりする。一方、ステージでは日本舞踊や和太鼓演奏などが披露され、1日の最後には日本の花火がライン川にて打ち上げられる。日本人学校の教員が盆踊りに参加したり、合唱クラブの児童が日本の歌を歌ったりする場面もある。多くのドイツ人が訪れ、日本文化に触れ、日本人との交流を楽しむ1日となっている。

2. 現地理解を深める授業実践

今回、中学部社会科担当教諭として3年間デュッセルドルフ日本人学校で教鞭をとらせていただいた。そこで、ドイツに住んでいるからこそ体験できることを社会科授業の中でも実践していきたいと考えた。

(1) 社会科授業

①地理的分野

中学1年生では地域ごとに地理の学習をするが、「ヨーロッパ」地域の学習の発展として「ドイツ」にスポットを当てて、調べ学習を行った。ドイツについて生徒自身がテーマを決めて、現地に赴いたりインターネットを利用したりしながら、夏休み中にレポートを作成するという課題を与えた。2学期に各自が調べてきた内容についてレポート発表会を行うことで互いの情報交換をし、ドイツに関する学習を深めさせることができた。ドイツの農業や工業、交通について調べた生徒もいれば、ドイツの文化遺産について実際に見たことをもとに発表した生徒もいた。

②歴史的分野

中学2年生では毎年「2つの世界大戦」の単元の発展学習として、「戦争と平和」というテーマでレポート課題を与えていた。3年目の取り組みとして、例年よりもテーマを絞り込んで、春休み中に修学旅行へ向けての事前学習レポートとして以下のような課題を与えた。そして3年生の最初の授業3時間を使って、レポート発表会を実施し、保護者にも参観してもらった。多くの生徒が強制収容所について調べており、その悲惨な事実をみんなで共有できる機会となった。(以下レポート課題)

* 修学旅行へ行く前に自分が興味を持っていることを調べ、実際に行った時に現地での学習がより充実し活用できるような資料を作りましょう。(写真や資料を必ず貼り付ける)

例) ・ベルリンの壁に関わること 東西ドイツの統一

・第二次世界大戦；戦時中の人々の暮らし、戦後の戦後処理；東西ドイツの分断

ナチ党・ヒトラーの政策、ザクセンハウゼン収容所に関わることなど

調べ方 (例) *新聞・図書館 *インターネット *資料集・教科書*現地調査など

③公民的分野

3年生の「ドイツ理解」の授業では、11月に州議会訪問が計画されており、それに向けて「政治」分野の発展学習としてドイツの政治について学習することにした。夏休みのレポート課題のテーマを「日本とドイツの政治制度の比較」に設定し、2学期の授業で、班別討論後に発表をし全員で共通点や違いを探ってみた。以下に指導案の展開の部分に掲載する。

時間	生徒の活動	教師の支援と評価
5	1. ドイツの政治制度についてレポート発表をする。	・夏休みに出した課題レポートを数名の生徒に発表させ、調べたことを振り返らせて、興味を引き出すような声掛けをする。
10	2. グループ単位で調べてきたことについて発表し合い、意見交換を行う。	・4～5名単位の班別隊形になり、各自が調べてきたことを出し合い、新しい発見につなげる。
15	3. 班で話し合っ、相違点や共通点を見つけ出し、ワークシートに記入する。	・班で出てきた意見をワークシートの表に記入することで整理して、そこから気づいたことをまとめさせる。 ・各班を回り、活発な話し合いになるよう声掛けをする。
15	4. 班の代表者がまとめた項目を発表する。	・各班の意見を聞いて、自分たちの班での話し合いと比較し、気づいたことや感じたことを書くことにより州議会訪問につながる課題を見つけ出させる。
5	5. 議会訪問で見学したいポイントや質問事項について考える。	・質問の時間に尋ねてみたいことや見学の目標を考えさせておくことにより、より充実した現地研修となるようにする。 ☆日本とドイツの議会制度に興味をもち、班員と協力して、自分が追究したい内容を明確にさせる。

(2) 総合的な学習－「ドイツ理解」

中学部では2週間に1回程度、総合的な学習の時間に現地理解教育として「ドイツ理解」という授業が、現地在住の日本人教員とドイツ人教員のチームティーチングで行われている。警察署の方に来てもらって話を聞いたり、ドイツ料理を作って会食したり、ドイツでは有名なクリスマスマルクト見学に出かけて実際に屋台で買い物をしたりと体験型の授業内容で、生徒たちはいつも楽しみにしている。

修学旅行直前の「ドイツ理解」では、2時間連続でベルリン名所巡りをホールで行った。各名所の写真が展示されその下には見所の説明が書いてあり、そこを巡って市内自主研修の事前情報を得るという学習である。

また、上記の州議会訪問では、ドイツ語を駆使して模擬記者会見を行ったり、議場に入って政党ごとに席につき、議長も選出して模擬議会をやらせてもらったりした。案内の方の説明がわかりやすく、実際に体験させてもらえ

たことでより理解を深めることができた。教科の授業とうまく連携が図れ、充実したものになっていった。

3. 行事から学ぶドイツの歴史や文化

(1) ベルリン方面への修学旅行

中学3年生は、毎年5月下旬に2泊3日の行程でベルリン方面へ修学旅行に行き、ドイツの首都や周辺地域を訪問することにより、ふだん以上にドイツの歴史や文化に触れる機会を持つことになる。私自身も派遣3年目に、3年生担任として生徒とともに修学旅行でベルリンを訪れる機会を得て、生徒たちが社会科歴史の授業で学んだことや調べたことを、実際に見学して学ぶ場面に共に参加できた。

修学旅行の行程は、初日はドイツ新幹線（ICE）でデュッセルドルフ中央駅からベルリン中央駅まで移動後、ポツダムの町にあるサンスーシー宮殿や歴史の教科書にも掲載されているツェツィリエンホーフ宮殿を見学した。宿泊はドイツが発祥の地とされるユースホステルであり、ここでも集団生活のルールについて学ぶことになる。

2日目はベルリン市内における班別自主研修を行い、事前に各班ごとに計画したコースに従い自分たちの力で公共交通機関を利用して、ベルリン大聖堂や博物館島などの施設を見学したり、ベルリン名物のカーレブルスト（カレーソーセージ）などで昼ご飯を取ったりした。今回は自分も引率するため、社会科歴史の授業の事前学習やレポート発表会で取り組んだ内容を実際に見学して学ばせたいという思いもあり、必ず通過するチェックポイントを、ベルリンの壁記録センター（監視塔）、テロのトポグラフィー、壁博物館（チェックポイントチャーリー）、イーストサイドギャラリーから選択するというルールを作った。ベルリンの壁の跡をたどり、事前学習の内容を確認し充実させることで、歴史の授業の発展学習となった。2日目の夜には本格的なオペラ劇場でバレエ鑑賞（演目：CARAVAGIO）を行い、全員正装をしてドイツでの鑑賞態度やマナーを学んだ。



修学旅行でザクセンハウゼン強制収容所を訪問

最終日には平和学習の一環として、「人間の殺人工場」とも呼ばれた強制収容所があるザクセンハウゼンを訪れた。事実を伝える話を現地に立ってガイドから聞き、その施設の内部などを見学することによりその惨状を知り、さらに詳しい状況について学ぶ機会となった。ナチスドイツの政策については社会科の授業でも学習したが、教科書からは計り知れないその現実を知ることとなった。2時間あまりをかけて、広い強制収容所の跡地を歩きながら、生徒たちはそれぞれの思いを胸にベルリンテーゲル空港から帰途についた。修学旅行を通して、実際にいろいろなものを目にして、多くのことを学び考える生きた学習となった。

(以下は修学旅行後の生徒の感想)

☆グループで一緒に行動することで、協力して目的地に着くことができた。強制収容所では足取りが重くてあまり見たくない写真もあったけど、起こってしまったできごとに目を背けないで真剣に学ばなければならなかった。



ライントワーの近くにある州議会を見学

☆3日間多くの場所を周り、多くのことを知った。特にザクセンハウゼン強制収容所はジェノサイドがどんなものかを知り、人の心理の恐ろしさというものを知った。もうこのような悲劇を起こしたくないと思った。何よりも戦争の生んだ悲劇をずっと覚えていたいと思う。

☆修学旅行に行く前からインターネットでその場所のことについて調べていたが、実際に現地に行ってベルリンについてより理解が深まった。

☆歴史が深いベルリンの中で、ナチ時代のユダヤ人迫害にも触れることができた。収容所では人々の差別、生命の大切さに気づかされた。今回の修学旅行は楽しみながら本当にたくさんのことを学んだ。

☆一番学んだことはドイツ・ベルリンの歴史でした。特に壁関係と強制収容所は強く印象に残りました。壁は実際に自分の目で見てきたし、博物館にも行ったので勉強になりました。強制収容所に行って、そこで起こったさまざまな悲惨なできごともしっかりと理解して帰ってきました。これらのことを受け止めていきたいと思いました。

☆強制収容所では小6の修学旅行の時よりもさらに平和の大切さと戦争の悲惨さを感じ、二度と同じ過ちを犯してはならないと思った。

☆たくさんの所に行ったけど、一番心に残っているのはやはりザクセンハウゼン強制収容所だった。歴史から目を背けたくなる場面も多くあったけれど、しっかりとこの歴史を受け止めたい。この3日間は短いものだったけれどその中でたくさん学ぶことができ、とてもためになるものばかりだった。

(2) 学校祭での創作劇 『大きな希望 平和への約束 ～統一への歩み～』

毎年9月下旬には、デュッセルドルフ日本人学校小中学部合同で、年間通して最大の行事である学校祭が行われる。展示発表と舞台発表があり、小学部では和太鼓の演奏、ミュージカル劇など発達段階に応じた発表が、中学部では脚本から演出まで生徒自身で行う創作劇が行われる。

6月に実施されたもう一つの大きな行事である小中合同の運動会で、全校生徒を引っ張るリーダーとして活躍したいという最高学年としての自覚を持っていた中学3年生に、日本人学校最後の行事となる学校祭でも最高のものを作り上げたいという強い意識が働いていた。夏休み前から実行委員会を組織して時間をかけて議論した結果、修学旅行で学んだことをもとにして、学校祭の学年劇でのテーマは『平和と友情』とし、「ベルリンの壁」崩壊前後のドイツの様子を描いた劇を作り上げることに決定した。脚本作成委員会を組織し、夏休み中に脚本の完成をめざして実行委員を中心に一からストーリーを考え、受験勉強の合間を縫ってメールを使って相談を続けていた。ベルリンの壁によって別離した幼なじみが壁の崩壊後再会するというストーリーであるが、途中何度も推敲を重ねる中でその内容が歴史的事実在即しているかについては、学校祭当日多くのドイツ人の方も見に来られることもあり、可能な限り慎重に調べるように心がけた。クラス全員が一丸となり熱心に練習や準備を行った結果、本番では素晴らしい劇に多くの観客の涙を誘った。

4. おわりに

日独交流150周年にあたる2011年に渡独し、日本と多くの共通点を持つドイツについては自分自身も大変興味深く、授業実践や現地訪問などを通じ、子どもたちとともに大いに学ばせてもらった3年間であった。せっかくドイツで生活する機会を得た子どもたちが、ドイツについていろいろなことを知るための手助けをしていきたいと常に考え、社会科の授業に取り組んできた結果、多くの子どもたちが自分から進んで調べ、ドイツへの興味を深められたと考えられる。